
想い櫻

はるかば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い櫻

【Nコード】

N7605X

【作者名】

はるかば

【あらすじ】

それは、遠い遠い昔のお話。
桜の精が人間の娘と恋をした。

序

さくらさくら・・・

もうすぐ春が来る

淡い色をした花弁が雪のように風に舞う

静かに、たおやかに

天女のまとう羽衣が風になびくような

そんな幻想を抱かせる春が来るのだ

お前を遠くへ連れていった春が来る

——
また、春が来る。

- 想い桜 -

「つぼみがついたか」

枝の先に現れた桜のつぼみを見つけて、咲耶さくやは誰に言っわけでもなくそう呟いた。
その瞳は心なしに悲しい光を宿している。

「もう・・・そんな季節なのだな」

そう言った咲耶さくやの瞳は、他のもの・・・そこにはない何かを映し出していた。

あれから何度目の春が来るのだろうか。

「桜乃さくの・・・俺はいつまで待てば良いのだ」

「咲耶様^{さくや}」

どこからか自分の名を呼ぶ声がある。

その声には覚えがあった。

少しが細かいが、しなやかで優しい声。聞けば心地の良くなる、そんな声だ。

樹齢五百年は優に超えようかという桜の大樹の上、その幹に寝そべっていた咲耶は、半身を起こすと地を見下ろした。一人の娘が地面から咲耶を見上げている。目が合うと、娘は満面の笑みを浮かべた。

「ああ、やはり。ここだと思いました」

「なぜ分かった」

咲耶は、ふわりと樹の上から娘の前へと降り立った。

「分かります。咲耶様^{さくや}の事ですから」

そう言ってくすくすと笑う娘を見つめていると、愛おしさで気恥ずかしさが複雑に入り混じり、何とも言えない気持ちになった。そんな気持ちを誤魔化す様に、咲耶^{さくや}は娘をそっと自分の方へ抱き寄

せると、上方を見上げ軽く地を蹴った。
その瞬間、娘は慌てて咲耶の着物にしがみつくと、ギュッと目を閉じた。

「着いたぞ」

そこは、先ほどまで咲耶が寝そべっていた桜の幹の上。

娘を腕に抱いたまま、幹に腰掛けたが、娘はまだ目を閉じたまま着物にしがみついている。

しがみついたままの娘に、そう声をかけると、しばらくしてゆっくりと瞳を開けた。

それからきよろきよろと周囲を見渡し、ここがさっきまで自分がいた場所の真上…桜の樹の上だと確認すると、ほっと息をついて、着物にしがみついていた手の力を緩めた。

それから咲耶を見上げると、たしなめるように口を開いた。

「咲耶様！ 急に何処かへ跳ぶのは駄目ですと、以前申したではありませんか」

「…そうだったか？」

「・・・」

あの時、分かったとおっしゃったのに。

咲耶さくやの、どこかとぼけたような態度を見て、半ば拗ねたようにそう呟いた娘は、恨めしそうに咲耶を見つめると軽いため息をついた。
そして、気を取り直すと体の向きを変え、幹の上からの景色を眺め、微笑んだ。

「今日は良い天気なので、遠くまで見渡せますね」

果てまで広がる青い空。

雲ひとつない穏やかな天気。

遠くには濃淡鮮やかな緑の山々。

眼下に広がるまだ咲き始めたばかりの桜と、黄色の菜の花群。

全ての色彩が美しい。

咲耶は娘の言葉に頷くと、目を細めてその景色を見渡した。

そして思い出す。

この娘…桜乃おつのと出会ったのも、こんな穏やかな昼下がりだったと。

02（前書き）

回想シーンの中での回想になります（笑）なんて紛らわしい。

「貴方は・・・誰？」

一人の娘が、咲耶を見上げて不思議そうに首を傾げた。

咲耶は、返事に窮した。

思わず周辺の人の気配を探るが、この娘以外、人間の気配は感じられない。

ということは・・・

極めて特殊な状況に、咲耶は、自分を見上げてくる娘をただ見つめ返すことしか出来なかった。

いつまで経っても返事の返ってこない咲耶を見つめながらも、娘は苛立つ風もなく、さらに問いかけた。

「そんなに高い所に上って、危なくないのですか？」と。

しばらくして、咲耶が言葉に出せたのはたった一言。

「...お前は...私が見えるのか？」

娘はその言葉に一瞬不思議そうに首をかしげた。それから驚いたようにどんどんと目が見開かれていく。そして、慌てたようにきよろきよろと辺りを見回した。

「…もしかして、周りには貴方が見えていないのですか？」

その問いに頷くと、娘は一度息を吐いて、自身を落ち着けてからもう一度咲耶を見つめた。それから深々と礼をして見せた。

「初めまして、幽霊様。私は桜乃おうのと申します。」

「・・・」

何という変わった女だと思った。

怯えるでも逃げるでも、ましてや気を失うこともなく、ただ真っ直ぐ自分を見つめてきた女は初めてだった。
というよりも。

自分の姿を实体として見る事ができ、会話までした人間は初めてだ。

咲耶は、得も知れぬ感覚を覚えた。

体がぼうとあたたくくなる——そう、まるで春が来て、初めて桜のつぼみが花開くような…そんな高揚感。

その感情が何なのか、その時の咲耶には分からなかったのだが。

「…あ」

小さく呟かれた声に、意識を目の前にいる桜乃へと戻す。

「これも貴方の力なの？」

「？」

瞳をキラキラと輝かせて、桜乃は咲耶のいる場所よりも少し右上を見上げている。

その視線を追って、咲耶は少し上を見上げた。

そこには、時季外れの桜が一輪、花開いていた。

それから、桜乃は毎日のように咲耶のもとへと現れた。

話す内容は、とりとめのないものばかりだった。桜乃が九割話せば、咲耶は一割話せば良い方…という、一方的な会話だったのだが、それでも桜乃はいつも笑顔だったし、咲耶もそんな雰囲気は苦痛ではなく、むしろ心地良いとさえ思っていた。

本当は、一人でいることが寂しかったのかもしれない。

そう思うようになるまでには、さほど時間はかからなかった。この五百年余り、一体どのように過ごしてきたのかすら思い出せないほどだった。

目の前に在る光景が移り変わっていく様を、感情もなくなただひたすら見守り続けていただけ。

ただ、村とともにそこに在り続けるだけ——それが、桜の精霊の使命だと思っていた。

なのに。

今まで灰色だった景色が、桜乃が来ると途端に色鮮やかになる。

最初は、単なる好奇心で桜乃に接していた咲耶も、やがて桜乃が来る時間を心待ちにしていた。

桜乃が楽しそうだと自分も楽しい。

桜乃が哀しそうだと自分も哀しい。

桜乃を取り巻く、全ての憂いから守ってやりたい、と。

いつしかそう思うようになっていた自分に気づき、人間と同じように感情をもっている自分に戸惑い、そして咲耶は知る。

——これが愛なのか、と。

そして咲耶は悟る。

——この愛が実るはずもないことを。

「咲^{さく}耶様？」

呼ばれてふと我に返る。隣を見ると、桜^{おうの}乃が微笑んでいた。

「ほおら、また」

「また？」

桜乃の言葉を繰り返す。

「咲耶様は、いつも何処か遠くを見ておいでになる。私には見えません」

それが口惜しいのです。

桜乃は俯き、そう呟いた。

その寂しそうな表情に、咲耶は思わず肩を引き寄せた。桜乃は一瞬体を硬直させたが、すぐに弛緩させると、その身を咲耶へと委ねてきた。

「私は咲耶様と同じものを見たり、感じたりしたいのです。…それは、私の我が侘なのでしょうか？」

思わず桜乃を見やる。それに気づいたのか、桜乃はゆっくりと咲耶を見上げた。

まっすぐ見つめ返してくるその瞳に、咲耶は言いようのない愛おしさを覚えた。

「・・・我が俤ではない」

「愛」という感情でさえ覚えただけの咲耶には、こんな時何と声を掛けてよいか分かるわけがなかった。

しばらくの沈黙の後、やっと口に出せたのはそんな一言だった。

明後日の方を向き、呟くように紡がれた言葉は、それでも隣に座る桜乃にはちゃんと聞こえていた。

驚いて思わず目を見開いてしまった桜乃は、その後頬を朱に染めて可笑しそうに笑う。

「・・・なぜ笑う」

やつのことで紡ぎ出せた言葉を笑われ、咲耶は少々憮然とした表情で問うた。

「咲耶様は人間よりも人間臭いお方です。私はそのような・・・顔を真っ赤にした咲耶様を見ることができて嬉しいのです」

「・・・」

なぜだか気恥ずかしく感じた咲耶は、それを誤魔化すかのように桜乃を抱く手の力を強めた。

「ふふっ・・・」

それでも、桜乃がまた可笑しそうに笑うので、咲耶はもはや知らぬ振りをして、桜乃が落ち着くまで明後日の方向を見続けたのだった。

ひとしきり笑った後、桜乃は咲耶と同じように樹の上から村を眺めた。

「私は、ここから見る景色が大好きでございます」

「…俺も。ここから見える景色は格別だと思っている」

咲耶がそう同意すると、眼下に広がる景色を見つめたまま、桜乃は微笑んだ。

「時代は変わっても、ここからの景色は変わらず、のどかでいて欲しいものでございます」

「…そうだな」

「咲耶様、私は…桜乃は…この命が果てようとも咲耶様のお側にいます」

「…どうしたのだ、いきなり」

桜乃の突然の言葉に面食らいながらも、その様子がどこかいつもと違うことに、咲耶はようやく気づいた。

決意を込めたような姿に、どこか悲痛ささえ感じさせる。

その真意を探ろうと、幹にもたれていた体を起こし、桜乃の顔を覗きこむ。

だが、桜乃はすぐにまたいつもの柔らかな笑みを浮かべた。そしておもむろに咲耶の手を取ると、自分の頬へと導き目を閉じた。

「いきなりではございません。常々、咲耶様に添って生きていきたいと考えておりました。雨がこの地を潤すように、お天道様が作物の恵みを与えてくださるように…私も、咲耶様をお守りし、そして咲耶様に守られて生きたいと…」

そこまで言いかけて、桜乃は言葉を発するのを止めた。咲耶から思い切り抱き寄せられたからだ。

「心配せずともよい。桜乃は、俺が全身全霊をかけて守る。…桜乃が幸せであるためならば、俺はこの身が消え失せたとしても本望だ」

ただ在り続けるだけの存在だった俺に、生きる意味を見出してくれた桜乃のためならば…

強く強く抱き締めると、胸に抱かれたままの桜乃がくすりと笑う。

「咲耶様が消え失せてしまうのなら、私は幸せにはなれません。私は、咲耶様がいるから幸せなのです」

そうならないように、私が咲耶様をお守りしなくてはいいけませんね。

桜乃は、そう言うと咲耶の胸に頬を寄せた。

「私が…咲耶様をお守りします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7605x/>

想い櫻

2011年11月20日12時58分発行